

## 追悼の辞

相原 陽教授は、突然逝かれた。万物が青葉に包まれる5月末日未明のことであった。この悲報は、九産大の全職員に言い知れぬ痛惜の念と衝撃をもたらした。本学の全職員にとって、とりわけ旧商学部の同僚にとって、相原教授はそれだけ大きく、頼もしい存在だったのである。教授は、本学商学部に職を奉じて以来30年、一貫して御専門の経済政策論の分野で学問的模索を続けるとともに、本学における教育・研究の環境整備に大きな役割を果たされた。教授は、そのたゆまざる御努力と思慮ある御判断によって本学の発展に幾多の足跡を残されたが、旧商学部改組による経済学部開設がその最後の事蹟となってしまったことは悔やんで余りあるものがある。

今は故人となられた相原 陽教授は、昭和31年（1956年）松山商科大学（現松山大学）を卒業すると同時に、九州大学大学院経済学研究科に進まれた。そして大学院の課程終了後、2年間九州大学経済学部に助手として勤務されたが、昭和38年（1963年）には、創立後間もない本学に専任講師として着任しておられる。その後、相原教授は、その短すぎるとしかいえない60年の生涯を閉じるまで、ひたすら本学の発展に尽力してこられた。教授の研究者・教師としての、そしておそらく家庭人としての歩みは、常に本学の成長とともにあったとあってよい。

相原教授が、経済政策学者として多年学界に貢献されたこと、またその学風の中で多くの後進を育成されたことは、広く知られている。教授の業績目録を手にする人は、その研究生生活の成果が多彩であり、調和あるものであったことに感銘を受けるであろう。そこには、「経済学方法論」という純粹理論と「実証研究」という経験分析の調和・総合の軌跡がみられるの

である。しかも教授は、講義にさいしては、手書きの自筆講義案を使用し、年度ごとに稿を改めるのを例とされた。同じテキストを何年も利用し、そのうちに取り替えようなどと考えている大学教師には真似のできないことである。

相原教授を語る時、その学内行政における実績を抜きにすることはできない。教務部長、商学部長、図書館長、そして学園理事といった要職を歴任しながら、教授は、本学の発展方向を見据えて止まなかったものとおもわれる。相原教授の策は、私の知るかぎり、その碁風のように大局的であり、無欲であった。教授の「大局的にして無欲な見解」、「情意合わせもつ融通無碍な人柄」が、数多くの門下生や同僚たちに大きな影響を与えてきたと考えられる。この影響力は、その人を失ったとき私たちが等しく思い当たる種類のものである。

学部発足後わずか2カ月で相原教授を失った経済学部は、改めて今後の進路を模索しなければならない。しかし、学部構成員一同の協力によって、経済学部の前途を、教授のかねての期待どおり「明るく、希望あるもの」にすることができると信じている。

1993年11月30日

経済学部長 武野 秀樹